

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2023年6月26日	
所属部局・学年	野生動物研究センター・M1
氏名	西本千夏

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
愛知県犬山市、日本モンキーセンター (JMC)
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
動物園科学実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
2023年6月23日 ~ 2023年6月25日 (3日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
JMC キュレーター、新宅氏、高野氏、綿貫氏、赤見氏、田中氏
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
博物館の役割、種の保全ために重要な機関としての動物園について理解を深め、動物園に携わる人々の仕事を学ぶこと目的として、3日間日本モンキーセンターで実習を行った。
【スケジュール】 6/23 レクチャー、施設見学 6/24 標本実習 6/25 飼育実習、レクチャー、来園者観察
1日目は、新宅氏と綿貫氏によるJMCの成り立ちや霊長類学の歴史、展示の仕方についてのレクチャーを受けた。展示方法は様々であり、動物園側は、来園者が受ける印象や注目する点を考えて展示を工夫していることを学んだ。レクチャー後は、施設見学を行った。ワオキツネザルの展示方法が一番印象に残った。触れることができるぐらいにワオキツネザルを間近で観察することで、大変魅力的であった。あまりにも警戒心がなく、すぐ近くにくるので思わず触ってしまいそうであった。このように間近で観察できる魅力がある一方、この展示方法はトラブルが起きやすいと考えられた。飼育員が監視していても、触ろうとする人や、意図せずにワオキツネザルとの距離が縮んでしまう人がでてしまうため、双方にとってよくない結果を生んでしまう可能性があり、展示方法の難しさを感じた。また本来、野生動物とヒトはあまり出会わないものであるため、人々が身近に野生動物を感じ、ペットにしたいなどの欲求を生まないためにも教育面からも展示方法を考えることは重要であると思われた。

ワオキツネザルを間近で観察する様子

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2日目は、骨格標本の作製の方法を学んだ。私は、以前鶏で骨格標本を作製したことがあったが、作製期間が長く驚いた。今回は、ワオキツネザルの遺体から、皮や筋肉、脂肪を綺麗に剥ぎ取り、骨を水に浸す工程までを見学した。水に浸す前までにも工夫があり、手足の骨は小さいため、骨をなくさないように左右それぞれまとめてお茶パックに入れていたりした。水に2~3か月浸すことで、バクテリアに筋肉を分解させ、綺麗に骨だけが残る仕組みであった。製作途中のものを見せてもらったが臭いがきつく、バクテリアの威力を間近で感じる事ができた。標本を作製する大変さを理解することができ、一般の動物園が標本を作製できない理由が分かった。JMCでは人手不足にも関わらず行っており、貴重なサンプルを見ることができ大変ありがたかった。また、骨格標本以外にも標本の貯蔵庫も見学した。毛皮標本や剥製、サルに関連する絵や本、陶器などを見ることができた。胎子や内臓のホルマリン漬けやホルマリン処置を行う理由を学ぶことができ、大変貴重であった。今にも動き出しそうな標本ばかりで将来研究する人にとって、しっかりと残しておくことは重要であることを理解した。



2~3か月水に浸した骨

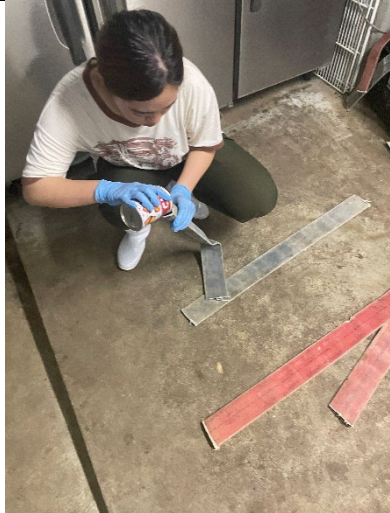


ホルマリン漬けの胎子

3日目は、飼育実習と来園者観察を行った。飼育実習では、ゴリラの部屋と新アフリカ館の8部屋の掃除と餌やりを行った。ゴリラの部屋の掃除では、ゴリラがどこにいるのか飼育員さんが2人態勢でやりとりを行い、掃除中にゴリラと鉢合わせないようにしっかりと連携をとっていた。ゴリラが外にいることを確認し、油圧扉を閉め、掃除を行った。部屋の広さはWRCの大部屋ぐらいで、掃き掃除、磨き掃除、餌の設置であった。掃除終了後は、ゴリラを中に入れ、きちんとご飯を食べているかなど健康状態を観察した。餌やりは、餌をやって終わりではなく、動物の健康状態に直結する重要な作業であることを学んだ。また、餌を単に置くだけではなく、フィーダーを設置することで野生本来の行動を引き出し、来園者に本来の姿を見せることができる大事な時間であることも認識した。アフリカ館では、ゴリラと違い磨き掃除が大変であった。特に、ヒヒ達は、うんちを床に擦り付けるので取るのに苦労した。他にも、果物や野菜を切り、餌の準備を行った。餌をケージに入れ、勢いよく食べてくれるのは嬉しかったが、あっという間にケージが汚れていくのは悲しかった。飼育員さんのルーティン作業や手際の良さ、大変さを実感することができ、貴重な体験となった。午後は、来園者観察を行い、来園者の会話から人々がどのようなところに注目して動物を見ているのかを調査した。私はヒヒの城(図)で来園者の観察を30分行ったが、見られたグループは3組だけであった。3組の主な会話は、「どの個体に餌をあげるか」というものであった。餌やりができる場所であったためこのような会話が多くなったと思われる。ヒヒの城は、JMCの中でも特に環境エンリッチメントが低いいため、環境に関する会話が多く聞かれると予想していたが、実際には1組のみしか聞くことができなかった。また、会話以外にも来園者の行動についても観察を行ったが、ヒヒの城に来るまでの経路の坂が急で、小さい子供を連れている家族は登ってくるのが大変そうであった。動物が過ごしやすい環境をつくるのは大事だが、来園者が過ごしやすい環境をつくるのも、来園者を集めるために必要であると思った。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



フィーダーに餌を詰めているところ



観察を行ったヒヒの城

3日間の実習では、JMCを通して動物園のバックヤードや動物園、博物館としての役割を学ぶことができた。飼育員の一部を経験でき、飼育員の動物への愛情深さや大変さを感じることができた。JMCでは、幅広い年代にむけて講習を頻繁に行っており、特に教育面を重要視していることが窺えた。また、伝えることの難しさも知ることができ、特に子供に対して教えることが大変そうであった。高野氏から「ゴリラはなぜ大きいのか、小学生に向けて1文で説明してください」を宿題として出されたが未だに分からない…。また動物園の役割の1つとして今後、JMC以外の動物園でも、教育や貴重なサンプルとして亡くなった個体の標本作製などを盛んに行うことができればよいなと思った。

※メンター（PWSプログラム指導教員）が確認済の報告書を【report@pws.wrc.kyoto-u.ac.jp】宛にご提出ください。

6. その他（特記事項など）

本実習を行うにあたり、受け入れてくださった日本モンキーセンターの皆様、及び引率をしてくださった山本先生に心より感謝申し上げます。